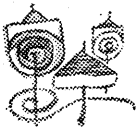
保育の工夫

幼児に与えるお話の工夫



早瀬渥子

お話は幼児の心の友だちです。良い友だちが相互に良い影響力を持つように、心の友だちも、当然、彼らに深大な歓喜を与え、さらに情操を豊かにしたり、探求心や知識欲を旺盛にしたりするものでなくてはなりません。心の友だちと遊んでいるときには、彼らは愉快な楽園をかけめぐり、眼をみひらいて未知のものを探し求め、まさに何かを得ようとしています。幼児は興味のある身近なものに関するお話に耳を傾けることをよろこび、次第により多くのものに興味を持って聞くことが出来るようになってきます。お話は幼児の心の友だちです。幼児は「お話」に包まれ「お話」に感化され、お話の世界に成長していくと云っても過言ではないでしょう。

私はこのように、幼児に与えるお話に非常に興味を持つようになり、既成のものばかりでなく、その時おりの幼児の興味に合せ、彼らに関係のあるお話を自分で作ってみたくなりました。しかし、幼児に対して強い影響力を持つお話を、はたして作ることができるでしょうか。お話は無分別に与えるとき、すなわち幼児の心理的な機能の発達程度を考慮せずに与えるときは、もちろん彼らの心や素朴な想像力に悪影響を及ぼさずにはおかないと思います。私は幼児により多くの夢をいだかせ、お話を通して、想像活動をよりいっそう豊かにしようと思いました。そしてバクのように真剣に聞きいる彼らの眼を思いうかべながら、お話について考え、学び、工夫し、道を歩きながら、あるいは窓からぼんやり外を眺めながら、お話を作るようになりました。

私はお話を作るときに、次のようなことに注意しました。私はおとなであり、幼児の世界との間には大きなへだたりがあります。まずそのへだたりを無くし、少しでも幼児の素朴な心の世界に接近するために、童心にかえって努めて幼児に接し、その考えかたや感情、思想、行動面をこまかく観察するようにし、次に彼らの興味のある親

しみやすい題材をえらび、明るい動的な内容に、適当な長さ、活動性、反復性、空想性などの考慮を加え、むやみに複雑になることを避けるようにしました。

私は四月から毎週一日、付属幼稚園で教育実習をしましたので、ここに私が自分でつくったお話を中心とした保育の一日をしるしてみました。

○クラスの環境

幼児年齢　三歳児

在籍数　十五名（男子七名・女子八名）

○最近、九月の幼児の生活状態

三歳児なので長い夏休みのあと、家庭生活への恋しさがいくらか残っているようであったが、幼稚園生活の習慣は案外早くもどり、遊びの内容も少しずつ進歩して三歳児なりにできるようになってきた。

○遊びの種類

（天気のよい日）ぶらんこ・砂遊び・すべり台・ジャングル・太鼓橋・自動車のり・組木・ままごと

（雨の日）絵本・組木・ままごと・まりつき・描画・人形芝居

保育室には金魚・せきせいいんこ・きりぎりす・でんでん虫を飼っているが、最近はとくにでんでん虫に興味を持ち、楽しそうに歌をうたいながら観察している。これは子どもたちが探し集めたもので、村井先生が鉢に入れ、緑の葉をしいて、穴をあけたビニールをかけたものです。

○実習日への準備

一、でんでん虫のおめんの下絵をかく。

一、でんでん虫を主題とするお話を創作する。

一、そのお話を画にかいて紙芝居をつくる。

九月二十四日　火曜日　晴

○目標

・最近、とくに興味を持っているでんでん虫のお面をつくらせて楽しく遊ばせる。

・でんでん虫のお話をしたり、紙芝居を見せたりして話し合いができるようにする。

九　時　登園、視診

十　時　製作、でんでん虫のお面をつくる。

十　時三十分　お話、でんでん虫のお家（自作）

十　時四十分　リズムあそび（紙芝居を用いて誘導する）

十一時　十分　降園準備

十一時二十分　降園

○保育記録

窓を開けると清澄な青空が私を力づけてくれた。花の水をかえ、周囲をざっと掃除

して気持よく室内を整えた。日曜日、秋分の日と二日休みが続いたので、とくに登園する子どもたちをあたたかく迎え、遊びに誘導するように心がけた。

八時半頃からひとりふたりと登園してくる。子どもたちは挨拶・手洗い・うがいをする。今日はお休みの翌日なので遊びたい気持をじゅうぶん発散することができるように、おもに外遊びの方へさそった。時おり、机上のでんでん虫に夢中になり、手洗い、うがいを忘れた人もいたのでうながした。さんさんごご登園、九時二十分頃皆がそろった。半数以上がお砂場で遊んでいる。男子は汽車ごっこ、女子はお菓子屋さんごっこ、同じ砂場にいながら別々の遊びをしている。

十時頃から「お部屋のでんでん虫さんがA子ちゃん、K子ちゃんに遊びに来てちょうだいって呼んでるわよ」、と二、三人ずつ、保育室から離れた所で遊んでいる子どもからさそい、でんでん虫のおめんをつくり始めた。ひとりだけ男の子で作ろうとしない子どもがいたが、「Nちゃんもでんでん虫になって、みんなと遊びましょう」と云うと、「僕も作る」と意志表示して作りはじめた。お面をかぶり、各々がでんでん虫になったつもりで、本物のでんでん虫と何か話しあっているようにみえた。Uちゃんが歌をうたいだした。それに合せてみんなもうたいだす。

「みんなかわいいでんでん虫ね、先生、でんでん虫のお家というお話をしましょうか」

ここで私の自作のお話をはじめた。

きのうも、その前の日もお休みだったでしょう。みんなはどこへ遊びに行ったかしら。先生はね、でんでん虫さんの所へ遊びに行こうと思ったの。

きのうは、今日のようにお天気がよくって、とても気持がよかったわね。先生はおべんとうを持って出かけました。「でんでん虫さんのお家はどこか」って「お山の中よ、お山には木がいっぱい生えてるでしょう、その木の葉の上なのよ」先生はお山へいきました。そして、大きな木の下で云いました。

「でんでん虫さん、こんにちは、遊びに来たの」あたりはとても静かでした。けれども何も返事が聞えません。今度は少し大きな声で呼びました。

「でんでん虫さん、遊びましょ」

木の葉は風に吹かれて、かさかさと音をたてました。けれどもやっぱりでんでん虫の返事は聞えませんでした。今度はもっと大きな声で云いました。

「でんでん虫さん、遊びましょ」

どこからかパカパカと足音が聞えてきます。おやおやお馬さんですよ。

「もしもし、でんでん虫さんですか、でんでん虫のお家はずっとずっと向うの方ですよ。さあ、私の背中におのり下さい。つれて行ってあげましょう」

先生は喜んで馬の背中にのせてもらいました。バカバカバカバカとても速く走ります。しばらく行くとお馬さんが云いました。

「僕、おなかがすいちゃった。お昼ごはんを食べてないのでもう走れないよ」

「まあ、私もまだなのよ、お休みしておべんとうを食べましょう」

木の下でおいしいおべんとうを食べていると「やあ、おいしそうだな」とお猿さんがやって来ました。「なーに」と兎さんも来ました。先生は皆におべんとうを分けてあげて仲よくたべました。それから皆で楽しく遊びました。あまり面白いので夢中になって遊んでいるうちにあたりはだんだん暗くなってしまいました。

「困ったわ、暗くって何も見えない」

先生は木のかぶに腰をおろして寝てしまいました。静かな夜です。お月さまがそっと登ってきて、あたりが明るくなった時です。ゆっくりゆっくりこちらに近づいてくるものがあります。

「もしもし、そんな所で寝ていては風邪をひいてしまいます。さあ、私のお家におはいり下さい」

そう云ったのはでんでん虫です。でんでん虫のお家はお月さまにてらされてとてもきれいに光っていました。

「ありがとう、でんでん虫さん」

先生はそう云って、でんでん虫のお家にいれてもらいました。するとでんでん虫はまたゆっくりゆっくり動きだしたのです。

「まあ、何てきれいなんでしょう」

でんでん虫のお家の中は、赤や黄色のクレヨンで描いたお花畑のようです。どこからかピアノの音も聞えてきました。先生はいろいろなおゆうぎをして遊びました。でんでん虫はゆっくりゆっくり動き続けています。そっとお窓から外をのぞいてみました。

「私のお家が見えるわ、お父さんとお母さんが手をふっている」

先生は大きな声で叫びました。それでもでんでん虫はだまってゆっくりゆっくり動き続けていました。

（おわり）

「先生はでんでん虫とおわかれするときに、おみやげをいただいたのよ。あけてみましょうか」

私の描いた紙芝居をだし、二、三人に一枚ずつゆきわたるように与え、順にまわしながらみた。

その紙芝居を用い、その場面場面をリズム表現し、お話を聞いたときの緊張をときほぐすことができるように、のびのびとおゆうぎをした。皆とても楽しそうだった。

時間が十一時十分になったので、お帰りの仕度をし、さようならをした。

（お茶の水女子大学保育実習生）

× × ×